

ぶんどたかだ 文化財ライブラリー vol.5

豊後高田の 国東塔



豊後高田市教育委員会

はじめに ～国東半島に展開する特異な宝塔～

「石造物の宝庫」とされる大分県にあって、とりわけ国東半島には多種多様な石造物が濃密に分布しています。中でも宝塔の一種である「国東塔」は、文字通り国東の地で独自の発展を遂げた石塔として特筆されます。

■国東塔の特徴

国東塔の基本的な構造は、①基礎が方形で2重または3重からなり、最上部の各4面に格狭間を彫ったものが多くみられ、②台座は円形で、請花と反花が両方揃っているものを本式とし、反花あるいは請花のみの簡略式も存在します。③塔身は有頸壺型で、首部を造り出します。塔身には、銘文や四方仏の種字などを刻んでいるものもありますが、銘文を有するものは国東塔全体の5分の1程度で、鎌倉～南北朝時代に造立されたものに多くみられます。また塔身は空洞に穿ち、納入孔と呼ばれる穴を有します。④笠は方形で、一般的な五輪塔や宝塔と共通しており、⑤笠の上には相輪が乗り、その先端には火焰宝珠を置きます。

国東塔が他の宝塔と異なる最大の特徴としては、塔身をのせる台座(蓮華座)を有し、塔身上部または首部に納入孔があることです。これは天台宗の最高経典である法華経を納めることを目的として成立したことを示しています。また、奉納された経典は「仏の教え≡仏そのもの」であるため、経典を安置する塔身には、仏像を安置する台座と同様の蓮華座が用いられていると考えられます。

すなわち、国東塔は一般の石造宝塔よりも尊厳を帯びた、「仏の塔」として創造されたと言えるでしょう。



国東塔の各部位の名称
智恩寺国東塔(県指定文化財)

■国東塔が造られた背景

国東市の岩戸寺に所在する「岩戸寺国東塔」(国重要文化財)が最古の国東塔とされています。塔身に刻まれた銘文から、弘安6年(1283)に造立されたことが分かります。国東塔が出現した鎌倉時代後期は、文永・弘安の役(蒙古襲来)による世情不安が高まった時期にあたります。国東半島に展開する六郷山寺院ではこの時期、さまざまな經典の転読や法会が執行され、「異国降伏」のための祈禱が盛んに行われました。国東塔に法華経を納める行為も、このような法会の一部であったと思われます。その後、社会情勢が変化すると、当初の意義は失われて様々な目的で国東塔は造立されていきます。



岩戸寺国東塔(国東市所在/国重要文化財/弘安6年(1283)造)

■国東塔が造られた目的

前述のとおり国東塔は、「仏法興隆」「国家安穩」などの祈願をもって納経する目的で造立されたものですが、次第に生前供養(逆修・予修)や追善供養、更には墓標などの用途として造られるようになり、造立の主体も寺院や僧侶から、俗人の願主へと広がっていきました。また、国東塔の形態的にも時の経過とともに構造や表現の簡略化が進み、当初の精緻さは失われていきました。16世紀後半頃には形状が著しく形骸化して衰退したとみられています。国東塔は鎌倉時代後期～安土桃山時代まで約300年間の長きにわたって国東半島各地に造立され続けてきた石造物なのです。

■六郷山寺院(六郷満山)とは？

古代の国東半島に所在した安岐郷・武蔵郷・国東郷・伊美郷・田染郷・来縄郷の「六郷」に由来し、この地に開かれた天台宗寺院を総称して「六郷山寺院(六郷満山)」と呼びます。国東の山岳信仰の場が、宇佐宮などの影響を受けながら「神仏習合」の独特な仏教文化を形成していったと考えられています。12世紀初頭に天台宗の傘下に入った六郷山寺院は、源平の争乱による混乱期を経て、安貞2年(1228)に鎌倉幕府から「関東祈禱所」(=幕府の祈禱所)に認定されたことで、幕府との結びつきを強めていきました。

■国東塔の“発見”

国東半島独自の形式を持つ石造宝塔を「国東塔」と命名したのは、京都帝国大学教授の天沼俊一^{あまぬましゅんいち}でした。建築史や古建築の調査研究を専門とする天沼は、1912年（明治45）に富貴寺大堂保存修理工事に関わることで、富貴寺を訪れました。大堂西側に立つ大小2基の宝塔を見て「非常に珍しい様式」



富貴寺国東塔(市指定)
「国東塔」命名のきっかけとなった



天沼俊一 肖像写真
[画像提供: 京都大学大学図書館]

だと思った天沼は、1914年（大正3）1月発行の『建築雑誌』に「豊後国東半島に於ける一種の石塔^お」と題して、初めて学会に紹介しました。その後、国東塔の名は人々に広く浸透し、国東半島を代表する石造物として認知されることになりました。

■ぶんごたかだの国東塔

豊後高田市は県下でも石造物が多数分布する地域です。大分県が2007（平成19）～2016（平成28）年度に実施した調査によると、県内には371基の国東塔が所在しており、市内にはその約3割にあたる109基もの国東塔が確認されています。塔ノ御堂国東塔や長安寺国東塔は鎌倉時代末期の造立に位置付けられ、市内における国東塔の最も古い例です。その後、鎌倉～南北朝時代の盛行^{せいこう}を経て、彫刻表現の簡素化や塔身の小型化などの変化を遂げながら、16世紀後半頃まで当地では数多くの国東塔が造られました。市内の国東塔を巡ることで、約300年にわたる造立の変遷^{へんせん}をたどる事ができます。

今回、市内に所在する主な国東塔を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の国東塔～ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.5～』を作成しました。本冊子が文化財鑑賞の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会



豊後高田市内の主な国東塔マップ

とう みどう くにさきとう 塔ノ御堂国東塔

・文化財指定
【市指定】

・位置情報
【33°32'33.9"N 131°29'19.5"E】

塔ノ御堂国東塔は小田原の内野下の平区に所在します。基礎は失っており、別石で補われています。台座より上の現高は267cm。請花と反花の間には縁（玉縁・敷茄子とも）を設け、縁から反花にかかる1か所に円形の納入孔が穿たれています。台座に施された蓮弁の彫りは見事で、塔身に彫られた四方仏（釈迦・薬師・阿弥陀・観音）と合わせて優れた造形技術を見せています。また、塔身上部から首部にかけても、納入孔が穿たれています。塔身にある銘文からは、延慶3年（1310）に願主の逆修供養のために造立されたことが分かります。笠は約3分の1を欠損し、相輪も上部を失っているのが惜しまれます。

塔ノ御堂国東塔は豊後高田市域における国東塔の初現的な事例の1つであり、首部の長い壺型の塔身や、軒口が薄く緩やかに反りをつけた笠部などに、岩戸寺国東塔を先駆とする鎌倉末期の古式国東塔の形式をよく受け継いでいるものと思われます。



塔ノ御堂国東塔



塔身に彫刻された四方仏のうち、阿弥陀如来(西側)

大願主	延慶三年	利益平等	為往生極樂	如法經該卷	戒壇衆生成	妙法蓮華經
□	□	□	□	□	□	者
□	□	□	□	□	□	諸
□	□	□	□	□	□	仏
□	□	□	□	□	□	出
	□	□	□	□	□	世
	□	□	□	□	□	之
	□	□	□	□	□	
	□	□	□	□	□	
	□	□	□	□	□	
	□	□	□	□	□	

塔ノ御堂国東塔 塔身銘文

カンカン堂国東塔

どうくにさきとう

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°32'30.9"N 131°30'01.0"E】

カンカン堂国東塔は、塔ノ御堂国東塔から東へ約1kmほど先にある原地区の水田の一角に所在します。現地には国東塔を中心に20基ほどの宝塔・五輪塔の残欠が並び、また当地を「^{とのほか}殿墓」と呼ぶ小地名が伝わっていることから、ここがかつて中世墓地であったことを示しています。敷地の中心にあるカンカン堂国東塔は、塔身や相輪の上部など多くの部材を欠失しているため、一見して国東塔とは思えない姿をしています。しかし、残欠部分の現高だけでも259cmあり、造立当初は相当な規模の国東塔であったことが想像されます。また、国東塔の大きさや、残された部材の彫刻表現、軒口の形状などから鎌倉時代末期（13世紀末～14世紀初頭）の造立と考えられます。

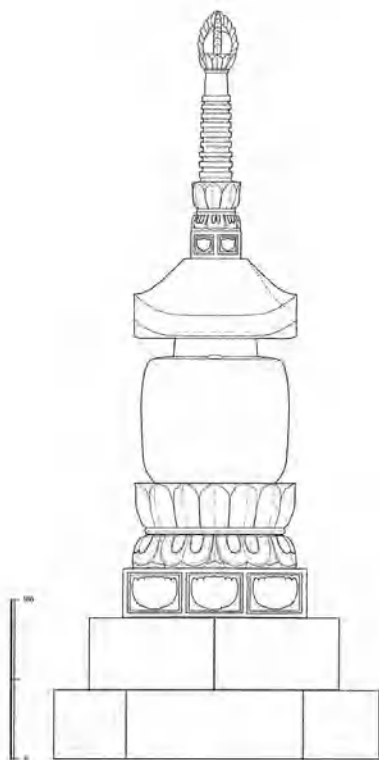
現状の形を踏まえた造立当初の復元図は右図のとおりで、欠失している塔身は、同時期の他の国東塔例を参考にして、やや首部の太い太鼓状が想定されました。結果として塔高は465cmを数え、国東半島でも屈指の大きさを誇る国東塔であった可能性が指摘されています。カンカン堂国東塔造立の背景には、当時の有力な在地領主であった小田原氏の強い関与があったものと推定されます。

■^{こだわら}小田原氏とは？

元は豊後国守護・大友氏の守護代として鎌倉時代に下向してきた一族。相模国小田原郷（現在の神奈川県小田原市）を本貫地としていたことから小田原氏と称したとされます。小田原氏は来縄郷に土着し、地頭職を得た土地を基盤として次第に周辺へと勢力を拡大させました。



カンカン堂国東塔
(別名：原国東塔、殿墓国東塔とも呼ばれる)



カンカン堂国東塔復元図
三谷・曾我・大山(2016)より抜粋

ちょうあんじくにしきとう

長安寺国東塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°34'06.9"N 131°32'56.7"E】

屋山（標高543m）の中腹に位置する六郷山寺院・長安寺の鎮守・六所権現社（現・身濯神社）の境内にある国東塔です。基礎は3重で、第3重の4面を2区に分けて形の良い格狭間が刻まれています。台座は反花のみですが、蓮弁も丁寧に美しく彫刻されています。塔身の造形も良く、笠は緩やかな勾配で軒口も薄く、両端で緩やかに反っています。

塔高は360cm。均整の取れた優美な塔として知られ、鎌倉時代末期造立の古式国東塔に位置付けられます。



反花の彫刻表現



長安寺国東塔

ふきじくにしきとう

富貴寺国東塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°32'16.6"N 131°31'42.2"E】

国宝・富貴寺大堂の西側に所在する国東塔で、3頁でも触れているとおり京都帝国大学教授・天沼俊一によって「国東塔」と命名されるきっかけとなった塔です。

塔高320cm、相輪の彫刻は的確で整った印象を受けますが、一方で台座の蓮弁（請花に2枚のみを線刻）や、基礎の格狭間を省略するなど簡略な手法が目立ちます。各部のバランスの良さや、大らかな作風は南北朝時代後半期の造立とみられます。

なお、本塔の隣には塔高155cmの小型の国東塔があります。こちらには塔身に四方仏の種字と、慶長8年（1603）造立の墨書銘が残っています。



富貴寺国東塔

またま はちまんしゃ くにさきとう
真玉八幡社の国東塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°35'56.1"N 131°28'41.4"E】

国東塔は真玉八幡神社境内の南側に広がる池のほとりに立っています。

塔高は286cm、基礎は1重で4面を2区に分けて格狭間を刻んでいます。また、台座は1つの石から彫成ちようせいされており、蓮弁の彫刻も小気味よく美しい仕上がりになっています。存在感のある塔身には、首部の納入孔とは別に中央付近に縦18cm、横22cmの長方形の「窓」があげられており、造立後に別の目的で追刻されたことは明らかです。「塔身に穴をうがとうろうち燈籠としてある」と紹介する資料もありますが、実際に本塔が燈籠として機能していたのかは不明です。

作風などから、造立時期は鎌倉時代末期～南北朝時代初期頃と考えられます。



真玉八幡社の国東塔

■転用された国東塔

上香々地かみかかちにある日枝神社ひえの神門をくぐると、参道を挟んで一对の“不思議な姿”の国東塔と出会います。塔身と笠部の間に火を灯す箇所である「火袋」を挟んで、燈籠として利用されていたようです。また、金谷町の妙壽寺みょうじゆじの庫裏前には、国東塔の塔身の上に蓮華座くりを重ねた形を手水鉢ちようずばちとして利用しています。いずれも珍しい使われ方をしていますが、国東塔が豊後高田の人々にとっていかに身近なものであったかを示す事例です。



金谷町・妙壽寺の
国東塔残欠を転用した手水鉢



上香々地・日枝神社の
国東塔を転用した燈籠

別名を木ノ下国東塔ともいい、^{うすの}白野の木ノ下区にある丘の南側斜面を少し^{さくへい}削平した平場に、正面を南に向けて立っています。

塔高は238cmで、基礎は2重、2重目の4面を2区に分け、格狭間を彫った中に^{れんじ}蓮子を刻んでいます。台座は請花（^{たんべん}単弁）・^{れんじゅもん}縁（連珠文）・^{ふくべん}反花（複弁）からなり、優れた装飾をみせますが、崖面に接する後方は彫刻を省略しています。塔身は有頸で胴部が丸い形状です。笠は^{てりやね}照屋根（＝反り屋根）で、軒口の両端近くで上辺を急にツンと反り上げているのが特徴です。相輪の彫刻も台座と同様に精緻です。全体のまとまりが良く、どっしりと落ち着いた塔といえます。

造立時期は南北朝時代～室町時代初期と思われます。



雲雀丘国東塔

■台座(蓮華座)の装飾

国東塔が他の宝塔と異なる最大の特徴が、塔身を支える台座(蓮華座)の存在です。これは、開いた蓮の花をかたどったもので、蓮弁の表現は国東塔ごとに異なります。右の写真のように、1重の花弁(花びら)を表現した【単弁】と、単弁が2つ並んだように表現した【複弁】に彫り分けたり、複数の蓮弁が折り重なるように表現した彫り方をしたり、実に多様です。台座の装飾を見比べることで、当時の石工や職人たちの技術や個性を垣間見る事ができるのも、国東塔鑑賞の魅力の1つです。



雲雀丘国東塔の台座に彫られた蓮弁
請花には単弁、反花には複弁、縁には連珠文を施す

あんようじ くにさきとう
安養寺国東塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°35'52.3"N 131°29'44.2"E】

なかまたま
中真玉にある安養寺の参道入口に立つ国東塔です。参道を挟んで向かい側には、室町時代造立の石殿（市指定文化財）が1基立っています。

安養寺国東塔は塔高215cmで、基礎は1重、各側面を2区画として格狭間を彫っています。台座は請花、縁、反花からなり、蓮弁の彫刻も見事なものです。地衣類等の影響から傷みが進んでいます。塔身は首部が長く、胴部が張っていて、丈の短い印象を受けます。笠は軒口が厚く緩やかな反りを見せています。相輪の先端を欠損（現在は復元）しているのが惜しまれます。造立年代は南北朝時代と考えられます。



安養寺国東塔

やきおとう もとくにさきとう
焼尾塔ノ本国東塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°36'53.6"N 131°33'43.2"E】

えびす
焼尾塔ノ本国東塔は、夷の焼尾阿弥陀堂がある斜面を少し下った尾根の先の小さな平場に所在します。

塔高は234cmで、基礎は2重、2重目の4面に区画を設けず、直に格狭間2個を彫り込んでいます。台座の請花・反花に刻まれた蓮弁は浅彫りの手慣れた彫法をみせますが、やや形式的な印象を受けます。塔身は球形に近い壺型、首部は別材で笠の下部と塔身の上部をホゾ状に差し込んでいます。笠は軒口が厚めで、塔高に比してやや扁平な形状になっています。相輪の彫刻もシャープで、特に露盤ろばんの側面には剣先を並べたような特徴的な線刻がみられます。南北朝時代の特徴が随所によく表れている国東塔です。



焼尾塔ノ本国東塔

わさだ くにさきとう
早田国東塔

・文化財指定
【県指定】

・位置情報
【33°39'06.5"N 131°32'02.6"E】

早田国東塔は、香々地の早田区の「^{との}殿屋敷」と呼ばれる畑の一角に各部材がバラバラで土中に埋まっていたが、1980年（昭和55）に積み直しされて、塔は元の姿を取り戻しました。

塔高は289cm、どっしりとした重量感がある国東塔です。基礎は2重で、2重目に3区画の格狭間を配しています。高さのある台座の反花が本塔の大きな特徴で、直線的で流れるような蓮弁の彫刻は見事です。壺型の塔身には、四方に金剛界四仏種字（阿闍^{あしゆく}・宝生^{ほうしょう}・阿弥陀^{ふくくう}・不空成就^{じょうじゆ}）を彫り、阿闍と宝生の間に、「曆應二（1339年）」「大願主沙弥實道^{しゃみじつどう}」の銘が刻まれた上に墨入れされています。なお、相輪は1980年に復元修理した時の後補です。

銘文にある「實道」という名前は、史料（黒田家文書）から当時の香々地荘の役人であった黒田氏に同じ名前の人物が確認できるため、早田国東塔が同氏の奉獻品だったことが分かっています。具体的な人物が造立に関わったことを示す数少ない例であり、歴史的にも貴重です。



早田国東塔
(別名：殿屋敷国東塔とも呼ばれる)



塔身の銘文と宝生如来(種字)



特異な形状の台座の反花

くまの ぼち くにさきとう
熊野墓地国東塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°28'46.7"N 131°31'13.2"E】

熊野磨崖仏^{まがいぶつ}駐車場のほど近く、田染^{たしが}平野^{ひらの}にある熊野墓地の中央に立つ国東塔です。周りには五輪塔・宝塔・近世墓など約250基が密集しており、中世～近世にかけて展開した墓地景観の様相をよく示しています。

塔高は310cm、1981年（昭和56）に欠損していた笠や基礎の復元を中心に保存修理が行われました。基礎の3重目を2区に分けて、陽刻の格狭間をつくっています。請花と反花からなる台座の彫刻は丁寧で力強く、相当な技量の高さをうかがわせます。



熊野墓地国東塔
但し、文化財としての指定名称は「石造宝塔(国東塔)」

塔身に刻まれた長文の銘からは「願主良秀」以下、20数名による「逆修」(＝生前供養)のため、応安8年(1375年)に造立されたことが分かります。また、銘文から国東塔の作者である大工(＝石工)の名前「大工道心五郎大郎」が分かるのも貴重です。

敬白

奉造立六郷熊野山石塔事

右寶塔志者为願主良秀

秀悦 廣弥 正慧 玄熊

幸慶 蓮秀 祐賢 良棟

明秀 定賢 寶妙 道鑑

寶吉 惟平 影光 浄一

衛門大郎 左近五郎 十郎

六郎三郎 諸大郎 心遠 妙忍

□□主隆位面々逆修為現當

二世心中所願皆令満足過去

七世親類靈等往生浄土

乃至法界成佛得道所奉

□□□□此壺基之石塔如件

應安八天 卯乙 麦秋上旬

大工道心五郎大郎

結縁分刑部四郎紀小太郎正順

大願主各敬白

ち お ん じ く に さ き と う
智恩寺国東塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°32'56.9"N 131°28'31.0"E】

かなえ
鼎にある六郷山寺院の1つ、智恩寺境内に所在する国東塔です。塔高は298cm、総体として細身でバランスの良い塔の形を示しています。基礎は3重、台座は請花・縁・反花からなり、縁・反花と4面に格狭間を刻んだ基礎3重目とは同じ石で出来ています。また、塔身は胴部の下方が緩やかにすぼまった「茶壺形」で、上方に納経のための納入孔がみられます。細部の形態や彫り口に鎌倉時代末期の古式国東塔の名残をみせますが、笠の反りや格狭間の形式などに時代の下降がみられるため、南北朝時代前半～中頃の造立と思われる。

なお、中世の智恩寺は小田原氏（6頁参照）が院主を代々世襲しており、同氏による来縄郷支配の拠点としての側面も併せ持った寺でした。



智恩寺国東塔

りゅうせんじ く に さ き と う
龍泉寺国東塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°30'04.7"N 131°31'02.6"E】

真木大堂に隣接する古代文化公園で、野外展示されている国東塔です。田染横嶺たしげよこみねにあった龍泉寺境内（現在は廃寺）にあったものを移設してきました。塔高は258cm、基礎は2重で、2重目に2個ずつ格狭間を刻んでいます。どっしりとした存在感のある塔身の上方に納入孔が確認できます。室町時代の造立と思われます。

■古代文化公園

国東塔の他にも、ほうきまういんとうほうきまういんとう、五輪塔、板碑、庚申塔など多くの種類の石造物を集めて野外展示している公園です。隣接する真木大堂の平安仏9軀く（国重文）と合わせてご覧下さい。



龍泉寺国東塔

たいぞうじ ぼ ち くにさきとう
胎蔵寺墓地国東塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°28'46.7"N 131°31'13.2"E】

熊野墓地国東塔（12頁参照）がある場所に隣接した一段高い場所が胎蔵寺墓地と呼ばれており、この敷地の中央付近に立っている国東塔です。

塔高は155cmで小型。基礎は2重で、台座は反花のみです。塔身は壺形で、金剛界四仏（11頁参照）の種字が細線で刻まれています。塔身西側に阿弥陀如来の種字「キリーク」と「法印忍秀」の銘、その横には「大永七年八月十七日」の銘が残っており、戦国時代中頃の1527年の造立であったことが分かります。

軒口が薄く反りの弱い笠、簡略化された相輪や、勢いを失った先端の火焰の表現などは、国東塔の造立が衰退していく時期の特徴をよく示しています。



胎蔵寺墓地国東塔

ごろうまる くにさきとう
五郎丸国東塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°39'29.0"N 131°31'56.2"E】

香々地の五郎丸地区にある「不動堂」と呼ばれる小堂の横に2基の国東塔が並んで立っています。

2つとも塔高はほぼ同じで1号塔が167.5cm、2号塔が175cmの、いわば「兄弟塔」と言えます。いずれも笠の一部を欠損する以外は、基礎・台座・塔身・笠・相輪のすべてを完備しており、保存状態の良い国東塔です。塔身の4面に金剛界四仏の種字を刻んでいます。軒口はやや厚く、両端に向かって強く反った笠が特徴です。両塔ともに国東塔が造られた時期としては最末期である戦国時代の16世紀前半頃の作と思われます。



五郎丸国東塔

■国東塔鑑賞の注意事項

- 国東塔は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。文化財保護の観点から、国東塔に直接触れるような行為は控えましょう。
 - 国東塔は地域の方々の信仰の対象となっているものもあります。鑑賞の際にはマナーを守って行動しましょう。拓本や実測など詳細な調査を希望する場合は、各寺院・管理者の意向に従ってください。
 - 私有地や山中などに立地する国東塔も数多くありますので、立入には十分気を付けて下さい。
- ※本冊子では、各国東塔の所在地の【位置情報】を表記しています。場所検索の参考・目安にご利用ください。但し、必ずしも所在地の正確性を保証するものではありません。

■「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」シリーズ バックナンバー



- Vol.1 『豊後高田の城跡』 平成30年度発行
- Vol.2 『豊後高田の磨崖仏』 令和元年度発行
- Vol.3 『豊後高田の古墳』 令和2年度発行
- Vol.4 『豊後高田の仏像十選』 令和3年度発行

※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内でデータ公開中!

詳しくは



【参考文献】 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館(1996)『石造文化財の保存対策のための概要調査—石造文化財の基礎調査報告書—』/大分県教育委員会(1979)『国東塔の分布と特色』/大分県立歴史博物館(2000)『大分県立歴史博物館 総合案内』/大分県立歴史博物館(2018)『聖なる霊場・六郷満山』戎光祥出版/大分県教育庁埋蔵文化財センター (2015)『大分の中世石造遺物 第3集 分布図・地名表編(下)』/大分県教育庁埋蔵文化財センター (2016)『大分の石造物～中世編～ 豊の国考古学ライブラリー 2』/大分県教育庁埋蔵文化財センター (2017)『大分の中世石造遺物 第5集 総括編』/国東市・国東市教育委員会(2012)『国東の文化財探訪—国東半島のくらしと祈り—』/九州国立博物館(2017)『六郷満山開山1300年記念 大分県国東宇佐 六郷満山展～神と仏と鬼の郷～』/酒井富藏(1972)『国東半島の石造美術』/豊後高田市(1996)『豊後高田市史 特論編—くにさきの世界 くらしと祈りの原風景—』/豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』/豊後高田市(2013)『豊後高田市の文化財』/真玉町誌刊行会(1978)『真玉町誌』/真玉町教育委員会・真玉町文化財調査委員会(1991)『真玉の文化財』/三谷紘平・曾我俊裕・大山琢央(2016)『中世小田原氏の石造文化～カンカン堂国東塔・塔ノ御堂国東塔の調査を通して～』『石造文化研究』第33巻

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.5

『豊後高田の国東塔』

発行：豊後高田市教育委員会文化財室
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp

発行日：令和5年2月28日発行

印刷：有限会社 宗印刷所

表紙：焼尾塔ノ本国東塔